

炭焼きで地球を救うぞ

木よ 森よ 11

ニッポン jimmyaku@asahi.com 人・脈・記



杉浦銀治さん

1999年、和田治史(66)は「もうけ話がある」と誘われて西アフリカのガーナまで出かけた。ところが、アチが外れてしまふ。

和田は転んでもただでは起きなかった。旧満州に生まれ、作業員もやったし、新箱でラーメン屋台を引いたこともある。いろいろな国も見に来た。

貿易でもしてみるか。和田はガーナで考えた。日本ではエスニックやエコロジーがブームだ。ここでとれる天然染料や植物油シアバターは日本で売れるかな。

もともと自分には南進の気質があると思っていた。バナナやマンゴの木がある庭にあこがれていた。だから、ガーナの植物の生命力に感動した。日本に戻る気はなくなっていた。

あれこれ調べるうちに、農業の貧しさに気づいた。ガーナは北がサバンナで南は熱帯雨林だ。北の住民は狩猟や炭焼き、焼き畑で暮らし、木を切り尽くすと次第に南下してくる。後に植林などしない。しかも炭は穴を掘って蒸し焼きにして作っている。効率が悪い。

ガーナにはインドセンダンが多い。生育が速く乾燥にも強い木だ。これを密に植えて、何割かを間伐して炭に焼けば、生活もできるし、残った木が森になる。製材所のおがくずや、油を採った後のヤシガラも日本の技術なら炭にできる。そう思っていた。NPO「ガーナ農林士芸振興協会」も作った。

和田はこの夏、帰国して「炭

焼き博士」と呼ばれる杉浦銀治(66)に弟子入りした。杉浦はガーナで炭焼きを指導したことがある。インドセンダンは有望だと和田を助ました。6年か7年で太さ20センチになる。炭にするにはちょうどいい。

杉浦は愛知県生まれ。農林学校を出てすぐ宮内省帝室林野局東京林業試験場に入った。最初の指示は「広葉樹からガソリンをこれ」だった。広葉樹を蒸し焼きにして出てきたガスに触媒を使う。どこにかできたガソリンは酸性が強く、エンジンがさびるなどのトラブルが続いた。

42年、太平洋戦争の真っ最中だった。「石油の一滴は血の一滴」と言われ、マツの根からは松根油が作られていた。でもマツの少ない広葉樹から油を作れなんて、日本は実は相当追い詰められているのかな。17歳の杉浦は思った。

戦後は農林省に移って定年まで林業試験場で炭の研究一筋に過ごした。60年代に日本の工業用燃料が石炭から石油に移った時、炭鉱には手厚い補償があったのに、木炭にはなかったのを今も憤る。

70年代からは木炭を農業に使えと主張し続けてきた。炭を土



和田治史さん

に入れば土壌の酸性を中和し、保水力を高める。有害物質を吸着し、水質も向上させる。炭はもろく分解しないから、二酸化炭素を土中で固定することにもなり、温暖化防止にも役立つ。炭焼きの途中で出るガスからは木酢液がこれに農薬の代わりになる。杉浦はこんなキャッチフレーズを作った。

「炭焼きは地球を救う」

日本の炭焼きは60年代から衰退の一途だ。役所でも「なんでそんな研究してるんだ」と言われた。だが、尊敬する上司からは「君は農林学校しか出ていない。出世コースよりも炭の道の方が楽しいぞ」と言われた。その通りだった。日の当たらない産業の研究だから、ノルマもない。好きなように研究できた。今なら事業仕分けの対象になるだろう。

時は移り、今や「木質エネルギー」という名前も木炭にも注目が集まり始めた。広がり続ける竹林の対策として竹炭作りも脚光を浴びる。炭の微粉末を入れた食品やせつけんも現れた。昔は想像もできなかった用途だ。杉浦は現職のころ、海外出張は韓国への一度だけだった。今は外国からの炭焼き指導の希望が引きも切らない。

2008年、英ニューカッスルで開かれた国際学会に杉浦は自費で参加し、慣長炭を打ち合わせてキンキンと澄んだ音を響かせながら15分間、日本の炭焼きの歴史を話した。スピーチを終えて短く切った炭を配ると、聴衆が群がった。

杉浦の手ほどきを受けた和田は、来年ガーナに戻る。金もつきの話など、すっかり忘れてしまった。アフリカで炭を焼く。和田の新しい夢だ。

(篠崎 弘)